

山本武利（NPO法人インテリジェンス研究所）

序

中野創立期の第4の男、上田昌雄―「忍術使い」教育の排除と自らの実践

岩畔豪雄、秋草俊、福本亀治に次ぐ功労者として上田昌雄という人物がいた。彼の後方勤務要員養成所第2代所長時代の1940年に中野カリキュラムからの藤田西湖の講義「忍術」がなぜ排除されたのか。このたびその経過をようやく突き止めることができた。

神戸事件という教官、学生による英国神戸領事館襲撃未遂事件が1940年1月に起き、初代所長秋草俊は同年4月に責任をとって海外に去った。岩畔は軍事課長という要職に就いて学校には顔を出せなくなっていた。この事件を收拾する過程で陸軍では初期の運営を担った兵務局や第5課の関与をやめて、陸軍全体での学校を立て直す方向へ転換した。その際イラン駐在やポーランド公使館付武官として実績のあった上田昌雄大佐を1時的に秋草の後任者にあてることになった。学校名も陸軍中野学校と改称させ、カリキュラムを一新させることになった。後方勤務要員養成所の所長を上田に任命し、3か月間上田校長時代が生まれた（これを裏付ける資料は山本武利『陸軍中野学校』66頁）。彼は北島卓美少将が正式に中野学校初代校長に任命されると、上田は幹事として北島を支えた。

上田は就任早々カリキュラムの全面改訂に取り組んだ。彼が1936年に関東軍に提出した「諜報勤務要領」（アジ歴C01003120300）は軍内部で評価されていた。「私はただちに教化内容の編成に取りかかり、謀略、諜報の二つの部門にわたってスパイ学を科学的に体系化し、これを基礎にして教科書を書き下した。それから外国語を完全にマスターさせるため露、仏、支那、マレー語などの専門家をひそかに招いて専任の教官とした」。軍人精神の涵養は「秘密戦士の真髓」と見なし、国体学を創設し、それを吉原政巳に担当させた。（偕行文庫「上田昌雄少将資料」）

以下の回想では「忍術使い」という言葉が2度も使われている。

●中野学校卒業生は、全世界を対象としてやらなきゃならんということを私の方針の一つにしました。また、それまでは何か**忍術使い**をこさえるという考え方でやっていたんですね。個人の力のある程度つけるということはいいいことです。しかし、これだけじゃいかん。科学技術を最高度に应用する必要がある。またみんな専門的な知識を持つとるんですから、それを活用するというようなことも非常に大事じゃないか

●私はね、秘密戦というものを体系化しようと思ったのです。**忍術使い**がやるのが秘密戦だという考え方でなくて、秘密戦というのはどういうものから成り立ち、そのおのおのはこういうものだということを確認する必要があります。私は、各科目にわたって、教育の要目を全部書いたですよ。ひと月かかりました。それを教官に示して、こういう姿勢でやるようにと言いました

(「陸軍中野学校幹事の回想—諜報に生きる」『歴史と人物』1980年10月号)

創立期の教育は忍者養成を目的としていたと見なした。当然藤田の講義は不要とされ、講師としての彼の再任はなされなかった。

パレンバン降下作戦のための現地偵察

1941年4月、中野学校幹事でありながら参謀本部から「蘭印の偵察を命ぜられ、外務省伝書使の身分を以てジャワ、スマトラを視察し、特に「パレンバン」攻略に就て報告す」(前出上田資料)ることになった。

その前に「参謀本部六課勤務の丸崎義男中尉(一期)は、将来の不測の事態に備えるためスラバヤ領事館在勤を命ぜられ、また同じ頃新穂智中尉(一期)は、パレンバンおよびジャンビの石油事情調査のため、同盟通信記者の身分をもって同方面に出張を命ぜられた」。上田大佐は直ちに現地出張のうえ、「新穂中尉、丸崎中尉とも連絡し、帰任後参謀総長に対し次の要旨の報告を行った」。(中野校友会編『陸軍中野学校』(以下『校史』)490頁)

上田の報告に従った日本軍のパレンバン降下作戦は大成功を収め、彼の忍者としての実践能力と中野教育方針への評価が高まった。

I 一期生を代表する忍者

長身スリムの目立つ長期忍者

長期学生は海外での長期滞在を予定して選抜された者である。欧米人との交流の中で引けをとらない身長、体重をもつべきとの発想が当局にあったと思われる。以下は二期生にあたる1939年末の入学者のデータである(C01004842000)。

	体重(キロ)	身長(cm)
長期学生 (41名)	61・4	165・5
乙種学生 (70名)	59・6	148・4
丙種学生 (50名)	61・5	160・4

このデータについて「長期学生ハ一般ニ体格並ニ健康状態優良」であるが、乙種学生やや劣るところがあると当局がコメントしている。165センチの身長は同時代の若者平均をはるかに凌駕していた。

一期生のデータはないが、写真を見るかぎり、足長のスリムな背広姿が目立つ。

大川周明が主宰していた満鉄東亜経済調査局附属研究所(通称大川塾)の学生募集がこの時期に行われていたが、全国の中学校に送られた募集要項には英数が出来ること、係累が簡単なことという条件に加えて「容貌に特徴がないこと」が謳われていた(『資料集 インド国民軍関係者資料集』497頁)。これを見た学校関係者はすぐに大川塾をスパイ学校と見たらしい。

中野学校の卒業生に「容貌に特徴」があったかどうかは分からないが、見映えのいい青年が多かったことはたしかである。

1、中国特務機関を渡り歩いた1期生エリートー井崎喜代治

履歴 山本武利『陸軍中野学校』152-153頁

井崎は常に日向にいた工作員であった。戦局は悪化していたが、中国ではそれが急激ではなかった。彼はインテリジェンスの能力という面では中野出を代表できる人物であった。日常会話でも、文章力でも、オモテとウラの見分け方、交流法でも抜きんできた、1期生でのスターであった。

彼は1944年では同期の他の3人とともに少佐に一番出世している。

参謀総長の特別訓令を戦後も懐にする井崎は1期生としての誇りがことのほか高かった。彼は1980年10月号の雑誌『中央公論』の同窓生座談会で創設者の秋草や東条英機大臣などに大事にされたことを後輩たちに誇らしげに語っている。

われわれのときは、専門の職員というものは3名しかいない。所長と、幹事と、係長。秋草俊大佐と、福本亀治中佐、伊藤佐又少佐です。あとは全部陸軍省とか、参謀本部、陸大の兼務者でした。養成所へは、ときには東条さん以下が視察をかねて講話にくるのですが、講話は、軍はお前たちにこういうことを期待してるんだ、しっかり頼むぞというような話が多かった。そうした教官や視察者たちの話の端々から窺がわれるのは海外の単独勤務の姿です。10年も20年も外地に土着して仕事をする。表向きの大使館付武官や駐在員は代わるけれども、お前たちは「代わらざる陰の武官」だと言われた。

中支那派遣の井崎、日下部、真井には参謀総長から以下の訓令が与えられた

- 貴官は主として中支那に位置し、約一年半の予定を以て研究に任ずべし
- 一、中支に於ける英米勢力の浸潤状況
- 二、支那に於ける秘密結社の研究
- 三、支那語の修得

さらに

「右ノ者ハ、長期ノ情報勤務要員ニツキ、ソノ大成スル如ク指導セラレタシ」

との文言が付加されていたという。

彼ほど短期間に中南支の各特務機関の要所を経験し、それぞれに機関長かそれに準じる要職に就いた中野出は珍しい。特務機関型の忍者であった。

アメリカ諜報機関 OSS に実名を掌握されているほどに行動幅は広がったが、逆に個人情報に敵に露呈するスキもあったことは否めない。

2、中南米の工作活動を1年半で中止、帰国させられた 牧澤義夫

牧澤は同期生と都内や旅行先で写したスナップを沢山残している。これらを見れば1期生が楽しく交流していることが分かる。①の写真後列一番右の扇貞雄と並んでその横に牧澤が写っている。また②の写真に立っている帽子をかぶったのが牧澤で、その横に立った新

穂智がいる。1940年8月にコロンビアの首都ポゴタの日本公使館に着いたが、10月27日にはコロンビア国立大学に開かれた剣道紹介の練習試合③では「応援ノ為雇員牧澤義夫ヲ出場」させたとの記載のある臨時代理公使の松岡洋介あての公文書がある（B04012487600）。そこでは現地の新聞記事と写真が大きくコピーされている。1941年発行の公使館発パスポート（④）では「外務書記生」と記載されている。

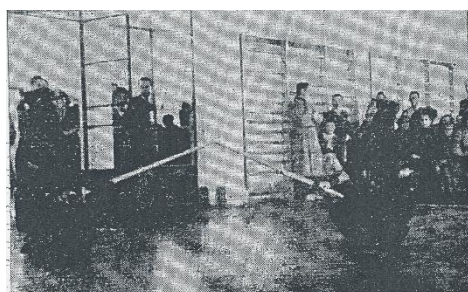
牧澤の身分を公使館では秘守する姿勢がなかったようである。彼は次第に思い切った行動を起こすようになった。ペルーから30kg（1億2千万円）のプラチナをエクアドル経由で日本船に秘かに通訳とともに積み込んだことがあった。しかし開戦で4月にコロンビア滞在1年半を終え、北米、リオデジャネイロ、シンガポール経由で8月に横浜に帰ってきたという（坂本昇二郎「最後の証言—陸軍中野学校〈第一期生〉牧澤義夫氏」『Intelligence』17号、2017参照）。



① 後列右が扇貞雄、扇の左が牧澤



② 真ん中が新穂、右牧澤



③ コロンビア国立大学の剣道披露



④ 牧澤の公用旅券

コロンビア公使館時代の牧澤は独立勤務を行う忍者の典型を示していた。

3、ニューギニア工作で無念の戦犯処刑された元同盟記者—新穂智

鹿児島中学を出てから 21 位歳で中野へ入るまでどんな仕事に就いていたかは分からない。同期生ではただ一人ジャーナリストに偽騙して同盟通信ジャカルタ支局記者となった。同期の丸崎義男はスラバヤ領事館に潜行し、兵要地誌や現地情勢の把握に努めていたが、両者が「たまたま二、三回会う機会があったが、お互いに任務も目的も話すこともなく、全く新しい知合として過ごした」（『校史』168頁）。両者は第6課に所属していたが、担当の参謀は指揮下に両者の交流を許さなかったからであろう。しかし先のパレンパン降下作戦の準備偵察を上田校長が行った際に、上田は両者に出あったことを証言している。開戦後の1942年10月の引揚船浅間丸には両者は同船している。なおこの際同盟記者斉藤も新穂と同船（『校史』513頁）していることから、彼がこの時まで同盟記者としての任務を継続していたことが分かる。

新穂は第19軍の司令部に配属され、西部ニューギニアの神機関の大尉班長としてホーランジャ工作班を指揮した。現地で他の班にいた徳野明（丙2）が1944年7月に新穂一行と合流したことを記している（「中野学校卒業後の任務の概要」『陸軍中野学校丙種第二期生の記録』）。このようにインテリジェンス将校として歴戦を生き抜いてきたが、その際の部下のオランダ兵捕虜虐待の責任を問われることになり、1948年12月、開戦7年目に死刑となった。その前日に認めた夫人への以下の遺書がある。

敏子殿

色々と苦勞して来たと思ふ。これからも又、苦難の道である。縁あつて私と結婚したが何も出来ず申し訳ない。強く生きて呉れ。私は明後12月8日、丁度7年前の開戦の日に死刑となる。私が戦犯として死刑になった事は何等卑下する事はない。和蘭軍が戦勝国として一方的形式的報復裁判で死刑にするのだ。

私は祖国のために最善を尽して活躍して来た者として反つて誇りをもって逝く。智忠を頼む。一目見たいが出来ぬが只残念。大きくなつたろう。育てるに当っては私が出発時話したる如く大義に基づいて育てよ。

そして、父の志を継いで祖国に殉ずる人間にして呉れ。夫らしい事は何も出来ず申し訳なかった。許してくれ。母上、兄弟によろしく。俺は日本人として立派に死んでいく。

山桜恵の光受けながら

つばみもつけずくちるくやしき
かくなれば我魂やどる吾子をば
まもり育くめ殉国の道
（「中野校友会々誌」第19号）

偽騙記者は世界各国機関には多いが、中野出では稀少である。

4、白系ロシア人・オロチョンなど異民族協力者への戦後の追悼活動—扇貞雄

一期生の扇貞雄は『ツンドラの鬼（樺太秘密戦実録）』という小冊子を1951年に出版している。参謀本部ロシア課に短期勤務した後、関東軍司令部に配属されて、満州国外交主事に偽装して、ソ満国境都市だけでなくモスクワ、リスボンなどを偵察する外交伝書使（クーリエ）の任務をこなした。またハルピンを舞台に白系ロシア人の反ソ活動を支援し、その実績が評価され、1941年上海軍に転属された。彼によれば、上海で「白系露人宅に一年半同居し、上海十五万人の白系露人掌握工作に没頭、工部局「ロシア」人連隊を傘下に指導したという。1942年、樺太敷香特務機関長となり、ギリヤーク族やオロチョン族などの協力を得て反ソ工作を行い、また北方ロシア人の動向を探った。

さらに1944年には南方総軍司令部に移り、スマトラ特務機関で活動。そして終戦時にはマレーの第29軍で工作隊長を務めた。

扇ほど日本軍の占領地域で幅広く秘密工作を実行した一期生は見当たらない。いずれの地域でも現地の異民族の協力を仰いだ。それには中野出の多くが絡んでいた。彼は1975年5月に神戸護国神社に立派な石碑の「北方異民族慰霊碑」を自費で建立した。その碑文の冒頭には「過ぐる大戦に於て無数の白系ロシア人、ギリヤーク人、オロッコ人が中野の子達と共に理想に参画し、非情なる最後を遂げ、帰るに安住の祖国さえなき事実を知らざる者、今日余りにも多い」と刻まれている。

扇は1984年に上海を訪ねた際に寸暇を得て、彼や日本軍に協力したがゆえに処刑された多数の白系ロシア人の処刑場を訪ね、彼らを秘かに供養した。

彼は独立志向の強い活動的な忍者タイプである。

II 第2期以降の長期忍者

5、一度も軍服を着なかった満州忍者—原田統吉

原田は1935年に大阪外国語学校を卒業し、1937年に応召した。1939年12月から1940年11月までの11か月間中野学校に在学した（乙I長）。関東軍司令部参謀部第2課に挨拶したときの上司は中野学校でソ連史を講義していた甲谷悦雄中佐であった。本属を隠して配属された牡丹江警察部分室（特務警察）は非公然の対ソ工作のインテリジェンス機関であった。インテリジェンスのエリートとして、「後方の安全地帯で手を汚さずに指導する」立場となった。原田の部下となった現場の日本人捜査官がソ連のスパイを拷問する場面を見て、原田はショックを受ける。「私は世にも凄惨で酷烈な風景の前に立っていた」と原田はいう（原田統吉『風と雲と最後の諜報将校』72頁）。

まもなく原田はその環境に慣れ、日本側が捕えたソ連スパイを逆スパイとしてシベリアへ投入する任務を懸命に遂行するようになった。その後奉天市警察局でも隠れた特務業務を行った。満州政府で現地雇用された満州人や日本人を内面指導する立場にもあった。1942年からはソ連の厳しいを潜り抜けながらソ連の動向をチタ領事館やシベリア鉄道沿線

で諜報活動に従事。終戦は領事館で迎えたため、シベリア抑留は免れた。

原田が中野を卒業して満州へ赴任する時、参謀第8班長として武田功は送別の宴を設けてくれるだけでなく、満州でも関東軍第2課長として部下の彼の行動を陰から温かく見守って、支援していたという。中野ネットワークができていたのだ。なお原田は終戦まで軍服を着ることがなかった。彼は秋草が理想としていた独立勤務の珍しい長期実践者で、しかも数々の貴重な忍者証言を残した。

6 ラジオ工作など幅広い謀略の推進者—山口源等（やまぐち ひとし）

山口源等（乙I長）は1939年12月に入った後方勤務要員養成所では山口姓を名乗らず、数種の偽名を使い分ける。その一つの「山ロー」が1941年7月から9月にビルマで援蒋ルートの情報収集に当たった旅券名義となった。その忍者行にビルマを共にした平館勝治によれば、山口はラングーン港で10日間、船の出入り状況を視察していたらしい。

藤原機関（F機関）の藤原岩市少佐と山口少尉は参謀本部第8課に所属して、上下関係にあった。山口は中野卒と同時に神田淡路町に出来た宣伝ビラ工作を担当していた。また山口は1941年、F機関が設置された際、1941年9月18日そろって杉山参謀総長から訓令を与えられた。

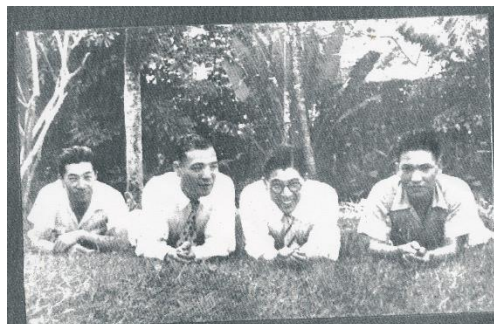
- 貴君らはタイ国首都バンコックに至り、同国駐在大使館付武官田村大佐の下において、主としてマライ方面の工作、特にインド独立連盟及びマライ人、華僑等の反英団体に対する工作に従事すべし。なお、企図の秘匿に関し留意すべし（山口源等「“F機関” 潜行記」『週刊読売』1956年12月臨時増刊号）。

彼らは早速偽名を与えられ、バンコク市内で潜行し、主として反英イギリスのインド人グループと秘かに接触する行動に移った。

- 私と山口中尉は山口は参謀本部からの交渉で、バンコック日本大使館の囑託ということになった。米村少尉はタイランドホテル（日本人経営）のボーイということに。土持大尉は大南会社の社員に、中宮中尉は日高洋行の社員に、滝村軍曹は武官室書記に手配された（藤原岩市『藤原（F）機関』40頁）



① 山口の軍帽写真



② 覆面時の藤原（左2番目）と山口（右2番目）

藤原、山口らへの厳しい警戒、尾行がなされた。田村浩大佐からは必要最低限しか武官室に立ち寄ってはならないとの指示を出した。

山口は工作準備過程においてサイゴンの第 25 軍司令部に送られ、「長髪背広姿の青年中尉が、懸命に報告している光景は珍しいことであったかもしれない。参謀連は一応了承した」という（『校史』391）。

マレー作戦の成功は山口の工作員としての評価を高めた。もともとの参謀本部 4 課とくに淡路事務所ではプロパガンダでの能力が認められていた。1942 年 12 月、南方総軍報道部放送課長としてシンガポールに転任、対外宣伝放送を行う。F 機関を引き継いだ岩畔機関ではインドへのラジオ工作の指導者として台頭。さらに岩畔機関が光機関となって、インドのインパール作戦が展開されるようになると、彼の担当するラジオプロパガンダの範囲はインド、スリランカ、ジャワだけでなく、オーストラリア、重慶、さらにはヨーロッパまで広がるようになった。英語、フランス語、中国語、ヒンドスタニー語など様々の言語を使ったラジオがシンガポール、サイゴンから、はたまたラングーンの陸軍基地から発信されるようになった。1944 年 8 月に内閣情報局主催で東京において開かれた東亜放送連絡協議会にシンガポールから出席した。彼の指揮下の関係要員は百数十名を数えた（『校史』549 頁）。

日本軍の放送はホワイト・プロパガンダだけでなく、ブラック・プロパガンダと多彩になった。1942 年 2 月ジャワ・バンドン攻略時にサイゴンから日本軍はにせのバンドン放送局を演出し、日本軍の無血に近い占領を導いたことがあった。この謀略放送では山口と中野同期の太郎良定夫が全般のプロセスを演出、指導した（『校史』497 頁）。このような謀略放送のノウハウは陸軍全体に引き継がれ、山口らの活動につながった。

*この「6、山口源等」と「10、平館勝治」の記述は 長崎暢子、田中敏雄、中村尚司、石坂晋也編『資料集インド国民軍関係者証言』研文出版、2008 年に依拠している。

7 卒業間もなくマレー前線で散った少尉—瀬川清治

F 機関が華々しい成果を挙げはじめた開戦まだ 1 週間も経たない 1941 年 12 月 14 日に瀬川清治少尉（乙 II 短）が戦死した。彼は同年 7 月に陸軍中野学校を卒業したての少尉で、つい 2 か月前にバンコクに来た三菱商事の「一介ノ雑貨商」に偽騙していた。

藤原機関長は彼の死を悼んだ（前掲書、123 頁）。瀬川少尉の戦死の様子は中野学校の教材にもなっていた（『校史』398—400 頁）。

彼は名誉の戦死として中尉に昇進したが、早すぎる死であった。

その後中野出はニューギニア、フィリピン、沖縄などで多数の死者を出すことになったが、彼の死はその先駆けであった。

8 中野出で唯一捕虜体験を著した男—渡部富美男

自伝『千里の道』の奥付の「著者略歴」には「1918 年姫路生まれ。康徳学院卒業後、姫

路第三十九連隊入隊。仙台陸軍教導学校、中野学校（乙Ⅱ短）を経て、中国・南京の支那派遣軍総司令部参謀部に赴任するが国民党の捕虜となり、様々な厳しい経験をする。捕虜を恥じて捕虜収容所で自殺に走った（未遂）。

2008年の自伝執筆時には、なるべく陸軍中野学校の経歴を記憶から抹殺したいとする姿勢である。彼は中野時代の同期生や生活についてほとんど語っていない。彼の自伝に出る唯一の中野出は同期の島田孝夫（乙Ⅱ短）である。彼とも1979年での偶然の文通による再会であった。その箇所の記述では、最初の出会いは仙台陸軍教導学校（予備士官学校）と書いた後、「第2回目にお会いしたのは、陸軍通信研究所（陸軍中野学校）に於いてであった」と記している。

しかし渡部は中野学校の存在意義を全て否定したわけではなかった。研究者菊池一隆からインタビューを受けた際、中野学校を、007の映画を連想するような「スパイ学校」とするのは的外れで、吉田松陰の心がけを伝えるのを使命としていると反論している。中野創業期の創設者の理念を、松陰の骨を埋めながら維新を实行しようとする姿勢と共通するものと理解していたことが分かる。

9 ラマ教徒工作を完遂できなかった仏教徒—幽径虎崑（ゆうけい こがん）

幽径虎崑（乙Ⅰ短、乙Ⅱ長）はラマ教徒に偽装した忍者工作に専念していた仏教系大学出で、かつ2年間もの特別長期の特訓を受けた中野出であった。伏在の忍者活動を実践に移した。

囑託の身分で1943年春までラマ教団の工作に従事した。青海の活仏で全蒙古活仏中の最高位にあるドガン活仏を表面に立て、彼の占いによって、外蒙古で憤死したノイン大活仏を内蒙古で転生させる工作に成功し、その転生祝賀大行事を盛大に挙げて、内蒙古人に大きな反響を与えた。

また2回にわたり、全蒙古から有力活仏を選んで日本を見学させた。全蒙のラマ寺は、西藏のラサにあるポタラ宮殿の隷下にあつて、昔から蒙古のラマ寺を統轄する組織は内蒙古にはなかった。そこで政府の外部団体として、ラマ教団の宗教行政を担当する組織を創設したりもした。これらの工作の結果、蒙古人の人心を掌握できた。これらのラマ教団工作で、徳王（蒙古政府主席）をはじめ政府要人、地方の王侯階級および一般庶民からも信頼を受ける結果となり、このことが、特務機関工作や終戦時の前線部下の収容に、大きなプラスとなったという（『校史』266頁）

だが南方とくにニューギニア、ビルマの激戦地に抽出された人員の穴埋めに現場から表に復帰せざるを得なくなった。彼は独立勤務の忍者を捨て、特務機関員となった。幸い南方に送られなかったが、専門の情報工作員としての実績を示す時間がなかったことを悔やんでいる（雑誌『歴史と人物』1980年10月号）。

彼以外の中野出の僧侶、牧師については寡聞にして知らない。

10 陸軍中野学校の生徒、参謀本部の御庭番としての候察—平館勝治（たいらだて かつはる）

●生年、学歴、職歴 1914・6・2

岩手県飯岡村生まれ

1932・3・9 盛岡中学卒

1936・3・17 盛岡高等農林学校獣医科卒

1936・5・10 ～1940・12・9 北海道庁滝川種羊勤務

1938・7・30 甲種幹部候補生

1939・3・9 陸軍獣医学校卒

●軍歴

後方勤務養成所入所（乙I長） 1939・12・1

陸軍中野学校卒業 1940・10・26

同時に参謀本部第6課南方班勤務

第8課第4班に転属 1941・1

南機関への転属・忍者活動 1941・7

ラングーン支部へ 1941・8

開戦で英国官憲に抑留、カルカッタへ 1942・1

ミッドウエー敗戦の記事に驚く 1942・6

横浜へ龍田丸で帰国、参謀本部第8課へ 1942・9～1945・4・30

各種工作へ部付将校の一人として「廊下とんび」のように走り回り、参謀将校など上司から決済印をもらう仕事（251頁）だが、「部付将校には参謀会議などの情報は伝えられません」（310頁）インド工作、ボース受け入れ、在日インド人の指導などを担当。

風船爆弾の扱いで東条英機を見直す（252頁）

各課中野卒との仕事上での話し合いなし

●中野学校での杉田一次少佐の米国講義と木村武千代の反軍閥演説

杉田の世話で木村はメキシコ駐在武官室勤務 281、302頁

●山口源等との付き合い 283頁

●「査覈（さかく）」講義について

このテキストは一九二八年に参謀本部が翻訳したタイプ版の「謀略宣伝勤務指針」のことである。平館証言はこれを使った創立初期の陸軍中野学校の教育風景を示している。「査覈（さかく）」といった難しい文字を使ったテキストを教師自身が十分に理解しないままに教師が壇上で生徒を煙に巻いて得意がっている。当時の一般大学や論壇でのマルクス主義などの講義を彷彿とさせるものである。このような高踏的な講義が秘密戦学校でも創立期では許されていたことが分る（山本武利『陸軍中野学校』100頁）。

●中野学校生としての所感

「私たち中野学校は3期生位までは職業軍人になる積もりはなく、現役将校に編入すると云われた時反対しました。昇進出世はもともと考えていませんでした。軍に頼まれたからやって来てやったという気持ちでした。皆、一般社会で生計をたてる腕はもっていませんから」309頁

●『校史』編纂への非協力

「陸軍中野学校の編纂の際にも、寄稿するようにすすめられましたが、一切断りし1枚の原稿も出しておりません。理由は上官の命令でやった仕事であり、私個人の自由意志でやったことはないからです。情報勤務業務は思わぬことで他人に迷惑を及ぼすことが間々あるものですから、常に慎重にしなければならぬと心掛けております」298頁

III 総括

1 1、岩畔豪雄らの中野忍者評価—特務機関員として

中野学校創立者のひとりで、自らも1942年から1年1か月間、インド工作を行う岩畔機関で中野出を使った岩畔豪雄は「準備されていた秘密戦」という文章で、「中野出身の将校が戦線のあちこちであげた輝かしい功績をいちいち列挙することはとうていできない相談であるが。当時機関長として部下に10数名の中野出身将校を使った私の狭い経験からいっても、彼らの勤務成績は抜群であって、積極的に危地におもむく勇氣、謀略、諜報などの処理能力等はとうてい一般将兵の追隨を許さぬものがあつた。中野学校出身者に対するこのような所感は私ばかりでなく、戦線の各方面にあつたらしく、中野学校出身者を要求する声は盛んになって、人事当局が出身者の割りふりに当惑したことは事実である」と証言している。(岩畔豪雄「準備された秘密戦」『週刊読売』臨時増刊1956年12月8日)

同様な文章はあちこちに散見される。創立期に参謀本部ロシア課班長で、中野でも2年間講師をしていた甲谷悦雄は中野出を各機関の取り合いだったと語った後、「関東軍参謀に転出してからもできるだけ多くの中野学校卒業将校に来てもらって、複雑困難な第1戦の各種の情報勤務についてもらったが、どこでもすばらしい成果あげてくれた。頼もしい限りだった」と絶賛している(「創立当時の思い出」『軍服の青春<陸軍編>』ノーベル書房、1979年)。

中野学校の評判を聞いて、ビルマ、北支、満州で類似のミニ中野学校が卒業生を招いて設立された。岩畔機関の後身の光機関は通算120名を超える中野出を受け入れていた。

中野初期に忍術を教えた藤田西湖は自伝『最後の忍者』の中で生徒をこう評価している。

●「ここには全国の連隊区から、素質の優秀な青年将校が集められ、近代戦に適応したスパイ術が授けられる。新しい言葉でこそスパイだが、昔流に言えば忍術に他ならない。昔からの伝統の甲賀流忍術は、ここに新時代の創意と工夫が加味され、堂々と国家のお役にたつこ

ととなったのである」(同、222頁)

●「私の関係したのは十六年の初めごろまでであるが、担当したのは精神教育と術科および体術、護身術の面で、術科は家伝である甲賀流忍術を現代戦に活かすことであった・・・忍術の忍は忍耐の忍であること、精神上的の忍耐、肉体的な忍耐を本領とすることを教え、体の基本的な鍛錬から始めた。むろん一人前の忍者になるためには、幼少から鍛錬しなければならないので、普通の人間を、わずか六カ月で鍛えなおすことはできないが、それでも、もともと粒ぞろいの生徒たちであるから、案外、期待以上の効果はあがった」(同、226-227頁)

●「ここでの教官生活は二年で、四度、生徒」を送りむかえたわけだが、送り出した生徒がどの方面の任地におもむき、どういう任務についたか、また生死の程もわからない。」(同、230頁)

12、限定された中野忍者の活動範囲

3期生までの学生は平舘がいうように、職業軍人になるつもりの方が少なかった。1期生18人は当初以下の軍関係機関に所属したが、総力戦が拡大するにつれ、元の職種に戻れなかった。

1期生の所属分類(卒業時)	特務機関	8名
	大使館・領事館武官室	6名
	陸軍省資料部	2名
	第5課	1名
	同盟通信社	1名

軍から変わった偽騙職種も以下のようなものであった。

多かった職種

- 1、商人、ビジネスマン
- 2、領事館員、武官
- 3、特務機関員
- 4、傀儡政府官吏、軍人
- 5、傀儡商社員

珍しかった職種

- 1、記者 新徳智(1期)
- 2、僧侶、牧師 幽径虎嵩(乙I長、乙II長)
- 3、教師

13、馬脚を顕したり、消耗品化されたりした長期忍者たち

1期生は18名だったが、その後中野出は急増し、最終集計 2458名（その内二俣分校609名、全体の4分の1）とかなりの数となった。下士官は589名と数が多いが、彼らは体験記、証言などは尉官に比べきわめて少ない。

創立時にはじっくりとインテリジェンスの教養を身に付けさせた独立勤務志向の情報勤務者、長期忍者を育成する意図をもっていた。しかし一番長い15カ月間教育を受けたのは1942年6月から1943年9月まで在籍した1乙（陸軍士官学校卒）と4丙（陸軍予備士官学校卒）だけであった。多くは1年未満の教育期間であった（山本武利『陸軍中野学校』89頁の表「陸軍中野学校期別学生数・在学期間」）。また在外勤務の武官室勤務では同盟国以外では在勤勤務は長くて2年以下であった。つまり長期忍者としての教育期間も勤務期間も短かった。

中野学校が存在した7年余り、戦局の推移が速く悪化したため、当初の構想にあった情報将校育成の成果を出せなかった。慌ただしい大量の促成栽培では人材は育たなかった。

「諜報謀略的人格」の戦士を育成せんとする1期、2期生の教育理念は、出発早々の神戸事件の発生と天皇発言で殺がれた。実践的、ミクロ的な秋草構想が崩れ、ついで科学的、マクロ的志向の岩畔構想や上田構想も縮小する。

卒業生は外務省に依拠しながらも陸軍本省からかなり自立した忍者を目指した。しかし外務省への依存度が高ければ、政府の方針に従属せざるを得ない。日米開戦と同時に彼らは敵国から引き揚げる選択しかなかった。彼らの行動を見て連合国は日本の奥の手を知った。多くの武官関係者は特務機関の末端将校として重宝がられたが、軍全体の工作での彼らの役割は小さく、インテリジェンス体制を動かさない消耗品で終わった。

1期生の場合、少佐になっても部下を持たなかった1匹狼であった。つまりラインに属さないスタッフとしてしか位置づけられていなかった。これでは名目上年功序列的に地位があがっても、軍の中での発言力の集積、増大は多きかった。